
THE LEDGEND

一閃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

THE LEDGEND

【Nコード】

N1864B

【作者名】

一閃

【あらすじ】

各々の国が均衡を保ち、平和だった世界。だが、それはもう崩れかけていた。ある時、青年ジークの前に一人の女性が現れる。彼は何を見て、何を思い、何を知ったのか？人の心と魔法が織りなすファンタジーノベル！

プロローグ

世界には6つの大陸と12の大国が存在する。各々の国には古代から守護神がついていて、過去に幾度となく自らの国を守ってきたのである。だが、今その世界のバランスが崩れかけていた。

1st ジーク

東の果てに存在するグラナード民国、国々の中でも最も民主的な国と言われ、最も小さく、あまり力のない国でもある。

昔から守護神として、光と時を操るグリフィンが奉つてある。その国の中でも小さな田舎町であるアークスでのことである。

まだ薄暗い道を走る人影があった。そのスピ

ードはすさまじく、周りの草花が揺れていた。

「ああ、もう走れない。」

その人影はそう言って建物に入ってしまった。

「ジーク、早く着替えて来なさい。今日は実技試験の日でしょ。」

「わかってるよ、母さん。今すぐ準備するから。」

彼の名はジーク、田舎町であるアークスにおいて少ない若者である。髪は透き通るような青、瞳は黒で、彼は今年で18歳になる。

ジークはそう言って、さっさと着替えて朝食を済ませて、愛用の双刀であるエンシエントを持って、家を出ていった。外は快晴、まだ5月だというのに少し歩くと、汗ばんでしまうほどである。

彼が向かう先はこの町の小さなコロシウムである。ソルジャーとして、少しでも高収入になるように試験を受けに行くのである。

2nd ソルジャーと仲間

この世界には、人間・魔獣・魔人・エルフなどのたくさんの生物が存在している。特に、人間と魔人は、自らの国を持ち、互いに争うことも多々ある。

「ソルジャー」

それは人間が各々の国から戦いに優れた者たちを集めて構成される軍団である。

その中でもランクがあり下からE・D・C・B・A・S・G Sとあり、各々ランクによって与えられる仕事や報酬が変わる。ジークは現在ランクはCである。

「よし、今日こそランクを上げてやる。」

ジークはコロシラムを前にして、意気込んだ。その時、

「いえ〜い」

と言う声が聞こえたと思うと、後ろから飛び蹴りしてくる青年がいた、ジークはそれを慣れた感じでかわした。

「ぐわ〜痛つて〜、避けんなよジーク。」

その青年は蹴りを避けられたために、5メートルぐらい転がって痛そうに身体をさすっていた。彼は、しなやかでしっかりとした姿で燃えるような赤い髪に黒い瞳を持っている。名前はウエルシュと言いいジークと同じ年であり、ジークの親友。同じソルジャーでランクはBである。

「バツカじゃないの？さっさとしないと、遅れるわよ。」
と一人の女性が言った。

彼女は、やはりジークの親友で、フレイといい、幼児体型の気が強い金色の髪に青い瞳を持った18歳。ソルジャーであり、ランクはBである。ウエルシュとフレイはお互いに気になっているようジークは感じているが、そのことを尋ねると二人ともあからさまに否定

される。まあそれが余計に怪しいのだが

「バカって言うなフレイ、だいたい何でそんな小学生みたい身体したお前が16歳にゃないと入れないソルジャーになってるんだよ。」

この言葉にフレイはウエルシュに鉄槌をくだした。

「うるさいわね。こんなに色気のある美しくかよわい女性、他にはいないじゃないの。ねえジーク？」

突然の質問に横を見ると、ぐったりとしたウエルシュが目に入ったのでここは合わせることにした。

「うん、フレイは魅力的だよ。」

「やだ、そんなこと言ったら照れるでしょ。」

ジークの背中にフレイの張り手が飛んだ。一瞬息ができなくなり、倒れそうになるが、なんとか持ちこたえた。

「うわ、もうこんな時間だよ。遅れちゃうよ。」

ウエルシュはいつの間に関立ち上がったのが、コロシウムに向かって走り始めた。

「おい、待てウエルシュ、まったくもう。しょうがないフレイ、オレたちも行こう。」

とジークとフレイもコロシウムに向かって走り始めた。

3rd 属性と女性

コロシラムの中は騒がしかった。ジークは受け付けを済ませると、近くのベンチに座った。

「受け付け済ませたか？」

声でわかる。ウエルシュである。と言っても普段はちゃらちゃらした感じのウエルシュだが、戦いを前にすると真剣な眼差しになり態度もだいぶ変わるのだが。

「ああ、もう済ましたよ。フレイは？」

「ここにさつきからいるわよ。」

フレイはウエルシュの後ろにいたため、姿が全く見えなかったのである。こう見ると、二人はお似合いに見える。

「んじゃ準備運動でもしようぜ。」

ウエルシュはそう言うと、二人も賛成し、コロシラムの中庭に行った。

「ジークはまだ魔法使わねえのか。」

「使わないんじゃないよ、まだ使えないんだよ。」

「なんで、覚えようとしらないんだ？お前の実力なら簡単に覚えられるだろ？」

「わかんないけど、何かどの属性の魔法も自分にあってる感じがしないんだ。」

フレイが会話に割って入って言った。

「ジークはまだ自分の属性がわかってないんでしょ。早くいろんな魔法を試してみ合わせてみなさいよ。」

「うーん、まあとりあえず今日はいいや。」

そんなことを話しながら一行は中庭についた。人はほとんど、いなくて何人かが、ウォーミングアップをしているだけであった。

「それじゃやるか。」

と言うと、ウエルシュは自分の武器を腰から取り出した。ウエルシ

ユの武器は拳銃より一回り大きいマグナムで、このマグナムに自分の魔力をこめることによって発砲する。炎と雷の属性をもつ彼にとつては良い武器だと思う。

「私はそんなもの必要ないんだけどね。」

と言いつつもフレイも武器を取り出した。フレイの属性は水と氷で、武器は長さ10メートルはあるつかという鞭でこれにも属性を付加させることができる。「オレは早く体温めないと。」

ジークも使い慣れたエンシエントを取り出した。

エンシエントはジークの父の武器であり、父は10年前、アークスにいたたった一人のソルジャーであり、村を守るために、一人で何百という魔物の襲撃を食い止め、命を犠牲にアークスを守ったのであった。その時からアークスもソルジャーを育成する方針をかため、ジークのもとに父の形見であるエンシエントがとどいたのである。

普通の片手剣と変わらない大きさながら、それはとても軽く、白と濃い紫の二つの剣は自分の身体の一部のように動くのである。三人がウォーミングアップを始めて、少したったとき、ジークは木の陰で眠っている女性を見つけた。その時、彼女に向かって拳ぐらいの石が飛んでいくのが見えた。

「危ない。」

とジークは走りながら言うと、彼女は起きたようだが、寝ぼけているのか、動く気配はない。ジークは急いで彼女のところへ走った。常人離れたスピードで、石に追いつき、右手の白のエンシエントで叩き割った。飛んできた方向を見ると、ウエルシュがこつちにごめんのポーズをしていた。大方、ウエルシュの攻撃に砕けた石が飛んできたのだろう。

「あなたは、光と時の魔法が使えるのですね。」

眠っていた女性はそう言うと身体を起こした。

「いや、オレは魔法は使えないですけど。」

「えっ、だって今二つの魔法を使っただじゃないですか。」

「使った覚えはないんですけど。」

「そんなんですか、でも自分の属性がわかったということとは、それを意識すれば今までより、強い力が出せるでしょう。その剣も相性がよいようですしね。」

と言うと彼女はコロシラムに向かって歩きだした。

「ちよつと待ってください。あなたの名前は？」

「いずれわかります。」

と言うと彼女はコロシラムに入ってしまった。

4 t h 実技試験

「どうしたんだよジーク？そんなにさっきのが悪かったのか？」

ウエルシュが控室で考え込んでいるジークに声をかけた。ジークは一人で考えても仕方ないと思い、ウエルシュとフレイに先程のことを話した。

「ジークが光と時の属性だなんて。とても珍しいじゃないの。だって歴史上のソルジャーでも数えるほどしかないのよ。」

「しかし、その娘は誰なんだろうな。」

フレイとウエルシュはそれぞれそう言った。

「まあ何にせよまずはこの試験のことを考えようぜ。」

ウエルシュはそう言うと、自分の武器を手入れし始めた。ジークもフレイもそれぞれ準備を始めた。

この試験はそれぞれランクをS、A、B、C、D、Eに分けて、くじで対戦相手を決めてランクの下のほうから戦い、その戦いを審査員が見て判断するというものである。最初にウエルシュが呼ばれた。ウエルシュはジークとフレイに笑顔を見せると、コロシウムに向かった。

ウエルシュの相手は同じランクBの剣と盾をもった男性だった。開始の合図とともにウエルシュは相手と距離をとり、炎を纏った弾を撃つが、相手の盾に防がれた。

「その盾が邪魔だな。」

ウエルシュは雷を纏った弾を撃つ。またも相手は盾で防ぐが、その瞬間相手は盾を手放した。ウエルシュの弾から感電した盾はもう人が持てる代物ではなかった。すぐさまウエルシュは魔法を唱えた。

「サンダーボルト。」ウエルシュの手から黄色の球が放たれたかとおもうと、目にもとまらぬ速さで相手を襲い、相手はその強い電気でしびれ、その場に倒れた。

ウエルシュは笑顔で控室に帰ってきた。どうやら満足できたよう

ある。

「どうだった？」

ジークが聞くと、

「楽勝だよ。んじゃ、オレはコロシラム袖で試合観戦するから、がんばれよ。ジーク、フレイ。」

「わかってるわよ。私だって楽勝にかてるわ。」

次にフレイが呼ばれた。フレイの対戦相手はランクCの大男で背中にフレイの二倍はあろうかと言うハンマーを持っていた。開始直後に勝負は決まった。フレイが

「チルドクラツシュ」

と唱えると、大男とフレイの間に巨大な氷の壁ができ、壁がそのまま大男に向かって倒れた。フレイは手加減したため、大男は死ななかつたが、致命傷を負いもう戦える状態ではなかつた。

「いいぞ、フレイ。」

ウエルシュの声が聞こえ、フレイの顔は少し赤くなつたが何もなかつたかのように、控室に戻つた。

「私も楽勝だつたわよ。相手はCだつたけどね。」

「それってオレにめちゃくちゃプレッシャーかけてない？」

ジークはそう言いながらも仲間の勝利に喜んでいた。

「ジークだつて魔法にさえ気をつければ相手がBでも勝てるわよ。」

「じゃあ、私はウエルシュのところ行くから。」

そう言うと、フレイは控室を出ていった。

ジークは考えていた。

自分は本当に時と光の魔法が使えるのか。

魔法は呪文を唱えなくても、武器に付加させたり、上達すれば自分の身体に付加させることができるといわれている。だが、それもセンスの問題で、まして本当にその属性かわかつていないジークにとっては、あまり関係のあることとは思えない。そう思い、とりあえず次の試合に気持ちを切り替えたその時、ウエルシュが息をきらして、控室に走ってきた。いつもとは違い、真剣な表情である。

「おいジーク、今この村に魔物の軍団が向かってきているそうだが、情報屋の話だと、なんでもこの村の祠が狙いらしい。」

「なんだって？他のソルジャーは？」

「もう迎撃に向かっている者もいれば、祠の保護に向かった者もいる。祠の保護の人数のほうが、極端に少ない。オレたちも祠に行こう。」

「わかった。急ごう。」

二人は村の近くの山にある祠を目指した。

村の祠は代々、アークスに受け継がれてきたもので、ここ数百年その中に入ったものはいない。何故なら入ろうとすると、いくら近づいても、まるで祠が自分たちから逃げているように、全く近づくとが出来ないのであった。最近は誰も滅多に近寄らないので汚れているが、ジークはその堂々たる風貌とどこか安心できるあの場所を気に入っていたのだった。

「今回の魔物は基本的にLv1らしいが一匹だけLv3が混ざっているらしい。」ウエルシュはジークに走りながら言った。

魔物は人間と同じく、自分たちの国を作っていて、12個ある国のうち、2個が魔物の暮らす国である。魔物にはLvがあり、生まれ時にはどんな魔物もLv1だが、それが限られた者のみが、進化をしてLvを上げていく。特にLv3以上からは非常に少なく、現在最強の魔物はLv5と言われており、一体しか存在しないといわれるが、その存在はまだよくわかっていない。

「ほとんどLv1なら迎撃に行ったAランクとかのソルジャーがみんな倒しちゃってオレたちは別に祠守んなくてもいいんじゃない」ジークは不満そうに言った。

「まあ数が多いようだし、一応だな。」

二人が走っていると、祠に近づくほどに血の臭いがしてきた。

「ヤバいんじゃないか？」

「うん、フレイたちが心配だ。急ごう。」

二人はその後、祠まで全速力で走った。

祠に着くとそこには、十数体もの身体の大きな魔物と、その中でボロボロになって戦っているフレイたち数名のソルジャーがいた。

「おいフレイ、大丈夫か？」

ウエルシュは魔物の合間を縫うようにフレイたちのところに行った。「大丈夫じゃないわよ。魔物の大群なんて罠でこっちにレベルの高

い魔物をよこすなんて！全く魔物も賢くなつたもんね。」
その時魔物が二人に向かつて炎をはいた。

二人は間一髪で避けたがそれを合図に魔物たちが一齐に攻撃を始めた。ジークは祠へ先回りして、一人で三体の魔物を相手にしていた。魔物のレベルは2、Cランクのソルジャーだったら、一対一で勝てるかどうかというところ、しかし今相手をしているのは三体、Bランクでもまず勝ち目はないと言つてもいいくらいだ。

「かなりキツイなこれは。」

そう言いながら、二人の方向を見ると、苦戦しているようでこつちを見る余裕もないようである。

「やるしかないか。」

ジークはエンシエントを取り出すと、目にも止まらないスピードで動き始めた。幸運にも魔物は身体の大きなぶん動きは遅い。一体的を絞り、走りながら何度も切りつける。

もう何度切つただろう。

ようやく一体を倒すことができた。

だが、予想以上に魔物は強くジークの息はかなりあがっていた。背中に衝撃が走った。魔物を倒して油断していたときに、他の魔物に蹴りをくらったようだ。ジークの軽い身体は踏ん張ることも出来ず、吹き飛んだ。吹き飛んだ先には三体の中で最も大きな魔物が三メートルはあるつかと言つ。棍棒を持って待ち構えていた。

「もうだめか。」

ジークは途切れそうな意識の中、そう思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1864b/>

THE LEDGEND

2011年1月16日05時00分発行